「食」と癒し
―「赦し」としての「癒し」―[1]

Essen und Heilung
―Heilung als Befreiung―

田尻 真理子

La découverte d'un mets nouveau fait plus pour bonheur du genre humain que la découverte d'une étoile.
Anthelme Brillat-Savarin, Physiologie du goût (1825)
新しいご馳走の発見は、新しい星の発見よりも人を幸せにする[2]。
ブリア・サヴァラン、『美味礼賛』

序

エピグラフは、ブリア・サヴァランの『美味礼賛』の一部である。図（1）（2）は、若い時分のサヴァランと、彼の名を冠した菓子である。「君が何を食べているのかを私に言ってくれたまえ。そうすれば、私は、君がどのような人であるのかを、君に言ってあげよう[3]」という一節はあまりにも有名だが、ここに掲げた一節では、食がいかに癒しとつらなっているかが端的に述べられている。

本論では、人間の根本と根源的につらなっている食と「癒し」について、究極的には「癒し」は「赦し」であることを論じる。

1　「食」の多様性

（1）「食」の多義性

ところで、本論のテーマは「食と癒し」だが、「食」という言葉は

多義的である。『日本国語大辞典』によれば、「食：食物を食べること。食事をとること。またその食事。／食用に供するもの。たべもの。くいもの。食物。食事。じき。餌食。／給与として支給される米。扶持米。食碌[4]。」とある。本論における食は、このうちの前二者を指す。

（2）食事の形態の多様性

また、食のスタイルも多様だ。昨今問題になっている、「孤食」、つまり、家族がいるにもかかわらず家庭内で一人で食事をする、というスタイルや、いささか尾籠で恐縮ではあるが、「便所飯」、すなわち「食事を一緒にとる友人もいないのか」とさげすまれることを恐れて、一人で食事をしているところを見られたくないがためにトイレの個室で食事をする、というスタイル。また発音は同じだが、家族で一緒に食事をしているにも関わらず、おのおのがそれぞれ自分の好きなものをてんでばらばらに食べる「個食」。

しかし、そもそも「食事」はその定義からして「孤食」や「個食」とは相容れず、「～と食べる」ことをその本質とする。

> 人間の“食事”という行動は、単に空腹を満たすため、あるいは栄養補給のためだけにあるのではない。人間は、祝うために、弔うために、また人と人、集団と集団を結びつけるためになど、実にさまざまな理由・目的からたべるのである。
> したがって、まず誰と食べ、誰と食べないかという<u>共食集団</u>が重要となる[5]。
> （下線田尻）

このように、単に「食べる」ことは「食事」ではなく、「共に」食することがむしろ「食事」の本質をなすと言える。

(3) 二つの「共食」

さて、「一緒に食べる」「共食」には、二つの形がある。

> 食事を共にすることは、集団の共同性・連帯性を表す手段である。日常的な共食は、ほとんどの社会において、一義的な社会集団（多くの場合は家族）の内部で行われる。共食はまた排他的様相を帯び、食事中の他家を訪れないという礼儀がしばしばみられる。共食は、社会の別の次元においても、集団の内部結合と排他性を表す。インドのカースト制度の下では、異なるカーストに属する者は共に食事をしない。他方で、非日常的な場面においても、共食は人と人とを結び付け、集団の連帯をもたらす。およそどの社会にあっても、共食は共同生活の諸行事に付随してもたれ、あるいは独立して行われる。ことに祭儀に伴う共食すなわち祭宴は、人々の交流や楽しみの場であるとともに、その社会の社会関係や世界観を表現し、社会を活性化させる重要な機会である。そこでは、人と人との共食だけでなく、神的存在と人との共食ももたれる[6]。（下線、網掛け　田尻）

すなわち、家族や同一共同体という人と人とが共に食べるものと、人と神がともに食べる「神人（しんにん）共食」という二つの形だ。図（3）は、ベネディクト会修道院の食事風景である。共同体によって食事のスタイル、作法は異なる。「新しい日常」とやらで昨今は食事中の会話が制限されているようだが、これまでは会話を楽しみながら食事をしたものであった。この図のベネディクト会の規則では、聖書や聖者伝の朗読を聞きながら沈黙のうちに食事をしたそうだ。

このように、共同体で定められたルールに従って人と人が食事を共にすることによって、連帯感や内部結合を強める効果がある。いわゆる「同じ釜の飯を食う」である。しかし、内部結合が強ければ強いほど、同一共同体は排他的な性格をもつ。この点については後述する。

共食のもう一つの形、「神人共食（しんにんきょうしょく）」は世界各地で古くからおこなわれている。日本でも食会（なおらい）、すなわち神事が終わった後、神様に捧げた食物、神饌（「しんせん」、あるいは「みけ」）をいただき神霊との結びつきを強める行事や、昨年行われた大嘗祭が神人共食のよく知られた例であろう。ちなみに、「お花見」も神人共食の一例である。図4は江戸時代、御殿山でのお花見の情景である。

桜の「サ」は、サナエ（早苗）、サオトメ（早乙女）の「サ」と同様、「清らかな」の意味をもつ接頭語であり、「クラ」は神々がそこに霊魂を宿す場、と考えられる。豊作を願う予祝行事として、神々の宿る桜の根本に酒を撒き、木の下で神々と共に宴を催したのである。これまで（というのは、新型コロナが蔓延するまで）お花見の際、ブルーシートで場所取りをして、桜そっちのけで宴会に興じていたのはその名残であろうか。

2　「食」と癒し

（1）「食」による経験的な癒し

本論では、この「共食」と癒しをとりあげるが、もちろん「食する」こと自体、さらにそこから得られる「美味しさ」自体、癒し効果があることについて、臨床経験例の報告があることにも触れておこう。

乳児の授乳の際の微笑みが、「味覚性快情動に関係した癒しの原点の一つでもある[7]」とする瀧田らは、「…味覚・口腔感覚からの快情動の表出に注目し、癒しへの効果について追及した。…おいしさ感覚から得られる快情動は精神神経免疫学相関から癒し効果が得られる…[8]。」と結論付けている。

味覚・味質と口腔感覚のもつ癒し効果、すなわち「おいしさ感覚」による癒しの効果は、「味覚嗜好性の表出（顔面表情や要求行

動）（仮死状態で出生、低酸素脳症・嚥下障害もある2歳女児）、抑鬱症状の解消、疼痛・焦りの軽減（乳癌再発・骨転移の30歳代女性）、鎮静剤の投与量等によって評価されている。その他、在院日数の短縮（食道癌例）、陰性情動・不穏行動の緩和（脳神経障害例）、コミュニケーションの改善（脳機能障害児）なども見られる[9]。

筆者らは、「美味しい」「食」による「味覚性快情動」の癒し効果がSOL（Sanctity of Life）[10]にも関わる恩恵をもたらすものとして重要視している。

3　キリスト教における食

さて、「食」は古今東西の宗教にとって重要な意味をもっているが、キリスト教も例外ではない。例外ではない、というよりもむしろ「食」が中心的な位置を占めているといってもよいであろう。たとえば、ミサ聖祭のクライマックスが、キリストの体と血をいただき、キリストとキリスト者が結ばれ一致する聖体拝領であるように。

> わたしたちが祝福する祝福の杯は、キリストの血にあずかることではないか。わたしたちの裂くパンは、キリストのからだにあずかることではないか。パンは一つだから、わたしたちは多数であっても一つのからだである。それは、みながともに一つのパンをたべるからである。…[11]」

聖体拝領は、最後の晩餐の記念であり、最後の晩餐が旧約に遡る過ぎ越しの祭りの食事を背景としている、など、「食」が要所要所にある。

（1）新約聖書における食

さて、旧約聖書にもたびたび見られるが、新約聖書にも随所に食

事の場面が登場する。そのいくつかを見ていこう

1）カナの饗宴

三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があって、イエスの母がそこにいた。イエスも、その弟子たちも婚礼に招かれた。ぶどう酒が足りなくなったので、母がイエスに、「ぶどう酒がなくなりました」と言った。 イエスは母に言われた。「婦人よ、わたしとどんなかかわりがあるのです。わたしの時はまだ来ていません。」しかし、母は召し使いたちに、「この人が何か言いつけたら、そのとおりにしてください」と言った。 そこには、ユダヤ人が清めに用いる石の水がめが六つ置いてあった。いずれも二ないし三メトレテス入りのものである。イエスが、「水がめに水をいっぱい入れなさい」と言われると、召し使いたちは、かめの縁まで水を満たした。イエスは、「さあ、それをくんで宴会の世話役のところへ持って行きなさい」と言われた。召し使いたちは運んで行った。世話役はぶどう酒に変わった水の味見をした。このぶどう酒がどこから来たのか、水をくんだ召し使いたちは知っていたが、世話役は知らなかったので、花婿を呼んで、言った。「だれでも初めに良いぶどう酒を出し、酔いがまわったころに劣ったものを出すものですが、あなたは良いぶどう酒を今まで取って置かれました。」イエスは、この最初のしるしをガリラヤのカナで行って、その栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた[12]。

これは「カナの婚宴」として知られるキリストの最初の奇跡である。婚礼の宴会で母マリアが、葡萄酒が枯渇している窮状を同席したキリストに訴える。「さぁなんのこってしょう、あっしにゃ関係ござんせん」と言わんばかりのキリストだが、そこはそれ、瓶に満たさせた水を上等な葡萄酒に変えるという奇跡で婚宴の危機一髪を救う。奇跡も流石だが、キリストのつれない態度にも動ずることなく、キリストの言うとおりにせよと召使に伝えるマリアのキリストに対する信の深さはさらに流石だ。

図5は、ダマスキノスというギリシャ系の画家の手になる「カナの婚宴」の場面である。ヴェネチア派らしくひときわ鮮やかな色彩に目を奪われる。ぎゅっと奥にすぼまる奥行き表現や、右手前の男性のひねった姿勢から画面全体にダイナミズムが感じられ、宴会のがやがやとしたにぎやかな様子が伝わってくるようだ。奥の消失点の位置にキリストが、その隣にうつむいたマリアがいる。これより300年ほど遡った、中世の趣を色濃く残すジオットの「カナの婚宴」（図6）は、対照的に平面的で静かだ。正面に花嫁が、その向かって右隣りにマリアが、左端にキリストが配されている。キリストは召し使いに甕を水で満たすように命じているところであろう。右端では、異時同図法で、キリストの命に従って、甕に水を満たしている召し使いが描かれている。ダマスキノスではどちらかといえば世俗的な宴会の賑やかさが前面に出ているのに対し、ジオットの作品は「婚姻」という聖なる秘跡の色合いが濃い。それにしても、キリストの隣の存在感薄い新郎に対して、正面に描かれた花嫁の堂々たる様子はひときわ目を引く。ジオットは何を訴えたかったのであろうか。

2）パンと魚の奇跡

使徒たちは帰ってきて、自分たちのしたことをすべてイエスに話した。それからイエスは彼らを連れて、ベツサイダという町へひそかに退かれた。ところが群衆がそれと知って、ついてきたので、これを迎えて神の国のことを語り聞かせ、また治療を要する人たちをいやされた。それから日が傾きかけたので、十二弟子がイエスのもとにきて言った、「群衆を解散して、まわりの村々や部落へ行って宿を取り、食物を手にいれるようにさせてください。わたしたちはこんな寂しい所にきているのですから」。しかしイエスは言われた、「あなたがたの手で食物をやりなさい」。彼らは言った、「わたしたちにはパン五つと魚二ひきしかありません、この大ぜいの人のために食物を買いに行くかしなければ」。というのは、男

が五千人ばかりもいたからである。しかしイエスは弟子たちに言われた、「人々をおおよそ五十人ずつの組にして、すわらせなさい」。彼らはそのとおりにして、みんなをすわらせた。イエスは五つのパンと二ひきの魚とを手に取り、天を仰いでそれを祝福してさき、弟子たちにわたして群衆に配らせた。みんなの者は食べて満腹した。そして、その余りくずを集めたら、十二かごあった[13]。

イエスはそこを去って、ガリラヤの海べに行き、それから山に登ってそこにすわられた。すると大ぜいの群衆が、足なえ、不具者、盲人、おし、そのほか多くの人々を連れてきて、イエスの足もとに置いたので、彼らをおいやしになった。群衆は、おしが物を言い、不具者が直り、足なえが歩き、盲人が見えるようになったのを見て驚き、そしてイスラエルの神をほめたたえた。イエスは弟子たちを呼び寄せて言われた、「この群衆がかわいそうである。もう三日間もわたしと一緒にいるのに、何も食べるものがない。しかし、彼らを空腹のままで帰らせたくはない。恐らく途中で弱り切ってしまうであろう」。弟子たちは言った、「荒野の中で、こんなに大ぜいの群衆にじゅうぶん食べさせるほどたくさんのパンを、どこで手に入れましょうか」。イエスは弟子たちに「パンはいくつあるか」と尋ねられると、「七つあります。また小さい魚が少しあります」と答えた。そこでイエスは群衆に、地にすわるようにと命じ、七つのパンと魚とを取り、感謝してこれをさき、弟子たちにわたされ、弟子たちはこれを群衆にわけた。一同の者は食べて満腹した。そして残ったパンくずを集めると、七つのかごにいっぱいになった。食べた者は、女と子供とを除いて四千人であった[14]。

上記は、癒しの技にひかれてキリストのもとを去らない大群衆の飢えを、わずかのパンと魚で文字通り癒した奇跡である。図7は、この奇跡の行われた場所に建てられた、「パンと魚の奇跡の教会」の床モザイクで、端的にパンと魚の図像によって癒しの奇跡が描かれている。

これらはいずれも「食」の場面での奇跡による癒しだ。しかし、

これほどのダイナミックな奇跡を伴わない次の「食」の場面にこそ、本質的な「癒し」が出来しているように思われる。

3）被差別者と食を共にする

> イエスはそこをたち、通りがかりに、マタイという人が収税所に座っているのを見かけて、「わたしに従いなさい」と言われた。彼は立ち上がってイエスに従った。イエスがその家で食事をしておられたときのことである。徴税人や罪人も大勢やって来て、イエスや弟子たちと同席していた。ファリサイ派の人々はこれを見て、弟子たちに、「なぜ、あなたたちの先生は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と言った。イエスはこれを聞いて言われた。「医者を必要とするのは、丈夫な人ではなく病人である。『わたしが求めるのは憐れみであって、いけにえではない』とはどういう意味か、行って学びなさい。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである[15]。

ここには、ドラマティックな奇跡もその奇跡による癒しも微塵もない。ただ、徴税人という当時共同体の最底辺にあって、社会的に疎外・排除されていた人々や罪人と食卓を共に囲んでいたことのみが記述されている。

図8、「マタイの召命」ではカラヴァッジョらしい光と影のダイナミズムにより、イエスの呼びかけを受けるマタイのドラマが描かれている。「え？わし？」とでもいうように、指で自分を指しているのがマタイでと言われてきたが、最近の研究では、うつむいている若者がマタイではないかともいわれている。件の食事はこの直後にマタイの家で行われた。

上述のように、食事を共にする、ということは共同体内部の連帯や絆を強める一方で排他的な傾向を強く持つ。ことにイエスの時代、宗旨を異にする人々や被差別対象者とともに食事をすることは

驚天動地の事態だったといえる。だからこそ、ファリサイ派の人々は、弟子たちに「なぜ、あなたたちの先生は徴税人や罪人と一緒に食事をするのか」と尋ねたのであった。イエスは、社会通念に逆らって、当時の良識ある人々であれば席を共にしない被差別者と好んで交わることにより、底辺に打ち捨てられていた人たちを受け入れ、癒したのである。

(2)「治癒神イエス」

こうした被差別者の癒しに関して、山形孝夫氏はイエスを「治癒神」として捉え、その活動を「ユダヤ社会の支配の論理や差別のイデオロギーとの、最も戦闘的な闘争形態ではなかったか」と指摘している。

> 原始キリスト教の最初の歴史は、病気直しの活動の歴史なのですが、それは病気そのものとの闘いであるよりも、ユダヤ社会が病気に強制した意味との闘いであり、結果的に「支配の力学」との闘争であったと私はみるわけです。マルコ、マタイ、ルカの三福音にしるされた、延べ百十五話にのぼる病気なおしの物語は、そのまま、初期キリスト教に占める治療活動の比重の圧倒的な大きさを伝えていると思います。それは少なくとも、キリスト教成立のもっとも早いある時期、救いが、イエスによる、あるいはイエスの「名」による癒しであった事実ときり離すことができないでしょう。病気癒しが、ユダヤ社会の支配の論理や差別のイデオロギーとの最も戦闘的な闘争形態ではなかったか、とさえ私は思います[16]。(下線田尻)

「治癒神」の概念は、遊行して患者治癒をおこなったと伝えられる、ギリシャ神話のアスクレピオス(図9)に由来している。

> わたしの魂は悩みに満ち、／わたしの命は陰府(よみ)に近づきます。／わた

しは穴に下るもののうちに数えられ、／力のない人のようになりました。／すなわち死人のうちに捨てられた者のように、／墓に横たわる殺されたもののように、／あなたが再び心にとめられない者のようになりました。…／あなたはわが知り人をわたしから遠ざけ、／わたしを彼らの忌みきらう者とされました。わたしは閉じこめられて、のがれることはできません[17]。（下線田尻）

山形氏によれば、この詩編の一節には、「不可触禁忌の疾病の故に、街を追放され、無人の廃墟か砂漠の荒塚以外に棲みつく場所のなかった人間の、救いようのない、絶望的な魂の叫びが描きだされてい」る。現実にあったユダヤ社会を背景に書かれた旧約聖書詩編の一節の状況は、イエスの時代のローマ帝政下のパレスチナの状況と重なるそうだ。それどころか、ファリサイ派によってさらに状況は厳しくなっていたという。盲者、不具者、癩病人や疫病にかかった人、悪霊憑き、つまり精神病者はこの時代、罪に穢れたものとして、人々から忌み嫌われ恐れられ、社会から徹底的に排除され、砂漠や墓場に隔離された。現代の「福祉国家」日本ではおよそ想像もつかない（はずの）その状況を山形氏は次のように語っている。

…ユダヤ社会をとおして、悪霊憑きや癩病人が、どれほど人々から恐れられ、忌み嫌われていたか、それをよくよく知らないとわからないのではないかと思います。それは神の呪いに、がんじがらめにしばりつけられ、生きながら葬りさられてしまった人々、それが癩病人であり、悪霊憑きとよばれた人々であったと思います[18]。

癩や精神病だけではない。すべての不治の障害が、当時のユダヤ社会においてどれほど忌み嫌われ恐れられ、しかも嘲笑と侮蔑の対象とされたか。それは、旧約の神ヤハウェが、癒す神であるよりも、むしろ不義を呪詛し、罪人を告発し、情け容赦のない過酷な仕方で、人も町も、荒廃に追いやる神であったという一面の事実と正確に対応している。

…たとえば、砂漠の表示語シェマーマ（shemamah）が、同時に、人間霊魂の「麻痺」状態を意味し、悪霊による荒廃を意味していたことによっても明らかである。台地のシェマーマが砂漠であるとすれば、人間のシェマーマは、癩を筆頭とする呪われた病気であったのだ。

イエス運動の第一の目的は、こうした棄民に向かって癒しの手を差し伸べること、こうした棄民に、神の呪詛からの解放を宣言することにあったのではないか[19]。

「病人すなわち罪に穢れたものすなわち排除されるべきもの」、という構図を徹底したのがファリサイ派であり、イエスはそれを打破しようとしたのだ。先に述べた、「ユダヤ社会の支配の論理や差別のイデオロギーとの、最も戦闘的な闘争形態ではなかったか」とはこのことである。

では、どのようにイエスと弟子たちは、差別のイデオロギーと「戦闘的に闘争」したのであろうか。

それが最も明白に表れているのが、「病気癒し」の場面だ。

ひとりのらい病人がイエスのところに願いにきて、ひざまずいていった、「みこころでしたら、きよめていただけるのですが」。イエスは深くあわれみ、手を伸ばしてかれにさわり、「そうしてあげよう、きよくなれ」と言われた。するとらい病が直ちに去って、そのひとはきよくなった[20]。（下線田尻）

そのうちに、彼らはベッサイダに着いた。すると人々が、ひとりの盲人を連れてきて、さわってやっていただきたいとお願いした、イエスはこの盲人の手をとって、村の外に連れ出し、その両方の目につばきをつけ、両手を彼に当てて、「何か見えるか」と尋ねられた。すると彼は顔を上げ言った、「人が見えます。木のように見えます。歩いているようです。」それから、イエスが再び目の上に両手を当てられると、盲人は見つめているうちに、なおってきて、すべてのものがはっきりと見えだした[21]。（下線田尻）

先の引用文は癩病者を、次の引用文は盲人を癒す場面である。いずれも、「罪に穢れたものすなわち排除されるべきもの」、すなわち「不可触賤民」であるが、イエスは「触れてはならない、触れることのできない」被差別者に文字通り手を触れて「手当」する（まさに「手を当てる」！）。

図10は初期ルネサンスの画家、ドゥッチオの「盲を癒すキリスト』である。中央右の盲にキリストが対面している。キリストの手はまさに盲の目に触れているところだ。そして異時同図法で、癒され目が開いた男がその右に描かれている。盲のときにしっかり握りしめていた杖をもはや手放し、「見える」ことの喜びが広げた手であらわされている。このようにキリストは触れて癒すことによって、さげすまれ差別されてきた人々を、排除の構造から救い出し普通の人々が住む社会に連れ戻したのだ。

先に述べた徴税人や罪人との食事も、排除のかなたに追いやられていた被差別者を食卓に迎え入れることで、受け入れたことになる。すなわち、病気直しの奇跡も食卓を共にすることもともに、「支配の論理や差別のイデオロギーとの、最も戦闘的な闘争」であり、その結果として、被差別者は「受け入れられ」「癒される」ことになるのだ。

（3）赦しとしての癒し

『ミサを祝う　最後の晩餐から現在まで』の筆者国井健宏氏は次のように述べている。

> イエスの宣教活動は…ユダヤ教の律法主義を正面から批判し、神の愛が無条件であることを示そうとした。その活動の中で食事は重要な意味を持っている。友人や弟子との食事、結婚式の宴席、特に貧しい人や罪びととの食事が伝えられている。それは人びと交わり、友情、赦し、受

け入れを表すものであり、神もこのように人びとを受け入れ、赦してくださるということを表すものであった[22]。（下線田尻）

食を通じての癒しは、つまるところ赦しにほかならないのだ。

ところで、「「仲間外れ？」「はぶる？」、いけないわ、そういうの。」、「「差別？」、とんでもない」と、わたしたちは「頭」では思っている。しかし、実態はどうであろうか。昨今の新型コロナの罹患者や医療従事者差別を思えば、一瞬にしてそうした「理想」は吹き飛んでしまう。悲しいことにわたしたちは日々の生活の中で不断に「差別」や「排除」をおこなっているようだ。なぜか。

障害のある人とない人が共に暮らす「ラルシュの家」を主宰するジャン・バニエは、この「排除」の元にあるのは「恐れ」だと指摘している[23]。「恐れ」にもいくつかの種類がある。まず、第一に「異議を唱える人」、すなわち「既存の秩序を脅かすように思われる人」に対する恐れだ。たとえば、古代にはキリスト教徒は既存の秩序に対する脅威とみなされ排除され迫害の対象とされた。もっともなことであろう。ファリサイ派の人々が構築した差別と排除の構造を「癒し」によって木っ端みじんにしようとしたのだから。第二に、「違い」に対する恐れだ。バニエはことに、自分と違う人として、障害のある人、とくに知的障害者に対する恐れが顕著であると述べている。第三に「挫折に対する恐れ」があげられる。自分と異なる人や未知の人にうまく対処できず交流することに失敗するという挫折を恐れる気持ちが、これらの人を排除することになるという。知的障碍者を排除するのも、この挫折を恐れる気持ちが働いているとバニエは指摘する。第四に、「損失と変化」に対する恐れがある。「お金と力のある人たち」は貧しい人と自分の富を分け合うのが怖い、つまり失うことが怖いのだ言う。失うのは富だけではない。地位や仲

間、評価までも失ってすっかり生活が変わってしまうこともありうるのだ。これらの恐れを回避するために人は排他的になってしまう。

私たちはイエスのように触れて病をいやすことは到底かなわない。しかし、自分にとって異質なもの、縁遠いもの、あるいは疎外されているものと食卓を共にすることはできる。上に挙げた「恐れ」を乗り越える努力によって。

最後に、図11は、ロシアのアニメーション作家、ユーリ・ノルシュテインの『話の話』という作品の一部で、「ユートピア」を描いた部分である。一家の主が通りすがりの見知らぬ旅人を食卓に招きいれている。とても美しい情景だ。

よく知られているように、「旅人をもてなすこと」は、「慈善行為の最も重要なものの一つで」ある。通り過ぎてゆく旅人を呼び止め、家に迎え入れることは、見知らぬ旅人が善人とは限らない以上、勇気がいることであるし、この旅人に二度と再び会う保証もないため、見返りを期待しない純粋な奉仕と考えられるからだ。

旧約聖書の「アブラハムのもてなし」を引用する。

> アブラハムはスフに天幕の入り口から走り出て迎え、地にひれ伏して、言った。「お客様、よろしければ、どうか、僕(しもべ)のもとを通り過ぎないでください。水を少々持ってこさせますから、足を洗って、木陰でどうぞひと休みなさってください。何か召し上がるものを調えますので、疲れをいやしてから、お出かけください。せっかく、僕のところの近くをお通りになったのですから[24]。」

そして、わざわざ子牛を屠って素晴らしいご馳走を提供したのであった」(図12参照)。

この旧約聖書に遡る「旅人をもてなす」行為がノルシュテインの作品にも描かれている。左端にたたずむのが、通り過ぎてゆく旅人

だ。一家の主が「一杯どうですか」と言っているのであろう。葡萄酒の瓶を振り掲げている。バッハの前奏曲をバックに流れるこの映像は、「食」による癒しをとりわけ鮮やかに表しているように思われる。

「触わる」ことによる癒しができないわたしたちでも、食卓を共にする癒しは日々の糧をいただく中で実践できるのではないだろうか。

---

[1] 本稿は、2020年10月24日、キリスト教文化研究センター主催シンポジウム、「癒し」における提題にもとづいている。

[2] ブリア・サヴァラン、『美食礼賛』、p.23

[3] Ibid.,

[4] 『日本国語大辞典　第7巻』、p.322

[5] 『文化人類学事典』、p.368

[6] 『日本大百科全書』、p.

[7] 瀧田正亮　et.al.,　「味覚性快情動からみた「食」と癒やし」、『済生会中津年報』、27巻2号、2016、p.204

[8] Ibid.

[9] 以上の例は、舌・口腔粘膜への味覚刺激（2歳女児）、経口投与であったが、興味深いことに、直接「口」を介して味わわずとも、「胃粘膜の一部や門脈系の一部に味質に対する受容体があり、迷走神経を介して脳に情報が入力されて」（Ibid., p.206）いる、つまり、「美味しい感覚」は消化管でも感じられているという。経腸栄養に味噌汁を応用した際の有効性が報告されている。なお、「美味しい」と思われるものを摂取すると痛みの閾値が上がり、逆の場合は閾値が下がるというラットの研究報告もある。

[10] Ibid., p.207、N.3、「生命の質」QOLに対して、SOLは、「生命の神聖さ」を意味する。

[11] Ⅰコリント10・15～23

[12] ヨハネ1・1 ～ 11

[13] ルカ9・10 ～ 17

[14] マタイ15・29 ～ 38

[15] マタイ9・9 ～ 13

[16] 山形孝夫、『治癒神イエスの誕生』、p.7

[17] 詩編88・3 ～ 5, 8

[18] 山形孝夫、ibid., p.68f.

[19] ibid., p.85f.

[20] マルコ1・40 ～ 42

[21] マルコ8・22 ～ 25

[22] 国井健宏、『ミサを祝う　最後の晩餐から現在まで』、p.18f.

[23] バニエ、『人間になる』、pp.101－114

[24] 創世記18・2b ～ 5a

図版

図1

ブリア・サヴァラン
『美味礼賛』、口絵

図2

図3

ポール・フリードマン
『世界　食事の歴史』、P.10

図4

神崎宣武、『まつりの食文化』、
P.207

図5

フリードマン、ibid.，P.108f

図6

辻成史、『新潮美術文庫 1 ジオット』

図7

マイケル・コリンズ、『ビジュアル大
百科聖書の世界』、P.311

図8

ジョルジョ・ボンサンティ、『イタリアルネサンスの巨匠たち 29 カラヴァッジョ』

図9

山形孝夫、『治癒神イエスの誕生』

図10

木村重信他編『名画への旅5　天上から地上へ―初期ルネサンス 1』

図11

ユーリ・ノルシュテイン、『話の話』

図12

木村重信他編『名画への旅4　天国へのまなざし』、P.108

文献目録

石川栄吉他編、『文化人類学事典』、弘文堂、昭和62年
木村重信他編、『名画への旅 2　古代Ⅱ・中世Ⅰ　光は東方より』、講談社、1994年
――――――、『名画への旅 4　中世Ⅲ　天国へのまなざし』、講談社、1992年
――――――、『名画への旅 5　初期ルネサンス1　天上から地上へ』、講談社、1993年
国井健宏、『ミサを祝う　最後の晩餐から現在まで』、オリエンス宗教研究所、2009年
コリンズ・マイケル、宮崎修二監訳、明石書店、2016年
サヴァラン・ブリア、関根秀雄他訳『美味礼賛』、岩波文庫、昭和63年
新共同訳、『聖書』日本聖書協会、2000年
瀧田正亮他、「味覚性快情動からみた「食」と癒やし」、『済生会中津年報』、27巻2号、2016年、pp.204－209
辻成史、『新潮美術文庫1ジオット』、新潮社、昭和51年
日本国語大辞典第二版、編集委員会、小学館国語辞典編集部、『日本国語大辞典第二版第7巻』、小学館、1972/2001
バニエ・ジャン、浅野幸幸治訳、『人間になる』、新教出版社、2005/2016年
フリードマン・ポール編、南直人＋山辺規子監訳、『世界　食事の歴史　先史から現代まで』、東洋書林、2009年
山形孝夫、『治癒神イエスの誕生』、小学館創造選書、1980年